

書評『ニホンカワウソ絶滅に学ぶ保全生物学』（安藤元一 著、東京大学出版会、2008年、本体価格 4400 円） この書評の本文前半はイタチ類の動物医学を卒論課題とする学部生が、また後半を当該学生の指導教員（すなわち、私）が追加・補完する方法を撰った。変則的でしかも学部生の消化不良的な文案に戸惑われるかも知れない。が、これも教育活動の一つ。御容赦賜りたい。（文責 浅川）

ニホンカワウソとこれに近縁な動物たちを様々な視点から眺めつつ、保全生態学の基本を学ぶもので次の 6 章で構成されていた（カギ括弧に各章題を示し、要約とコメントをした）。 「ニホンカワウソと人間の関係史」： 縄文以降のカワウソとヒトとの関わりについて、食肉・漢方薬、毛皮、害獣、飼養の面から解説。家畜(ウシ、ウマ、ニワトリ)と比べたら史料は少ないであろうが、カップ民話との関連性などは非常に興味深かった。 「カワウソという生きもの」： カワウソ類全般の形態・分類・生態についての解説。小型化した耳介、扁平な頭部、密で撥水性を有する体毛、短い四肢、手指間の蹼など潜水に適応した体型を具体的に理解させる記述であった。カワウソ類は鼻鏡など形態から分類されてきたが、DNA の塩基配列も併用されている。これは他の動物を対象にした分類（学）と一緒にあるが、ニホンカワウソの場合、このような遺伝子解析が一般的になる前に姿を消してしまったので、各地に残された剥製標本を用いるという。当然、困難な作業となるが、やっと得られた遺伝子配列も独立種なのかどうか未決。研究の厳しさを実感した。章後半の行動圏・様式、生息数・密度、餌資源、育児・成長は、動物医学含むどのような研究する上でも基本情報となろう。私は北海道に暮らすのでラッコの現状については、より有益であった。 「日本のカワウソ」： 前述のように江戸時代までは何千年も続いてきたニホンカワウソとの関係は、狩猟が無法的な状態になった明治時代以降、急変し、富山・北海道などにおける激減、個体数急減により大正時代には見せ物興業のネタになったという。そして、昭和半ばには本州・北海道からほぼ同時に姿を消していく。それに対抗するかのよう、愛媛と高知では保護施策がとられた。結局、ニホンカワウソは絶滅してしまうが、その克明な記録は、将来、有益な情報になろう。 「韓国のカワウソ」： 前述のように日本では山塩那結果であったが、その頃の韓国では、まだ（ユーラシア）カワウソが人々の近くに生息していた。この章は日本の轍を踏まないと願った活動の紹介である。韓国メディアや研究者の反応など大変興味深いものであった。 「世界のカワウソ保全活動」： 世界各国における様々なカワウソ保全の教育・啓発活動が記された。原則的にはこれまでの独自文化（カワウソ漁など）を活用することが、結局、多くの協力が得られるという。ドイツは成功国の一つであるが、この経験をアマゾン産オオカワウソ保全にも応用するなど日本との違いを見せつけられた。 「再導入を考える」： 再導入には個体数を増加させる直接的なものと、戻って来やすい環境再生を行う間接的なものの二つに分けられる。この二つのアプローチを主軸に、再導入の目的や生物多様性維持について解説された。要は人間にもメリットがなければ、保全施策（ここでは再導入）は決して成功しないことが良く理解できた。評者は、これまでただ単純に「どうやって再導入するのか」という技術に

のみ目がいったが、「いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ再導入をするのか」ということを事前に厳密に検討する必要性がよく判った。(文責 橋本)

「環境省佐渡トキ保護センター順化ケージにテン侵入、トキ捕食」、「ラッコ食害により歯舞漁協のウニ全滅」。どちらも本書評作成の佳境にあった 2010 年 3 月 11 日の北海道新聞朝刊に掲載された記事の主題である。在来のカワウソは姿を消しても、類縁者は存在感を日本人に強く印象付けているようだ。特に、ウニ食害報道は、北海道では大問題で、愛らしいラッコの姿と食い散らかされたウニ殻の大写真が第一面を飾った。が、(道内新聞購読者約 7 割の) 一般の方々は、どれほどこの動物達のことを知っているのであろう。エキゾチック・ペットか動物園動物の専門医を目指すため、獣医大に入学した学生(しかも、フェレットを飼育する専門課程真っ直中の学部 4 年生)ですら、前述のように本書で扱っている基本情報をご存じ無かった。その空隙を本書が埋めてくれたので、指導教員(私)としては安堵している。それはともかく、現在、日本語で読むことができるイタチ類の最良の参考書であることは間違いない。が、寄生虫学/野生動物医学の専門家として、少しだけコメントさせて頂く。p117 に「(北海道以外のカワウソについて) 科学的な調査は行われないまま終わった」とあるが、1972 年、高知県中村市(現、四万十市)の海岸で発見された死体については詳細な寄生虫学的な検査が行われ、その結果、鉤頭虫が得られた(Machida, 1973)。ただし、この鉤頭虫は、本来、ゴンズイのような魚を終宿主とする種であったことから、擬寄生現象(件カワウソの腸管腔内で餌となった魚の食渣の一部として発見されただけ)と解されたが、いずれにせよ、解剖にあたった町田昌昭博士は、当時、国立科学博物館の学芸員(現、目黒寄生虫館館長)、しかも獣医師の有資格者であった。したがって、「獣医師は関与しなかった」という記述も誤りとなる。この原著論文を検索・ヒットさせるのは酷だと思われるかも知れない。されど、10 年ほど前刊行された書籍(亀谷ら, 1999)で(しかも、同書中に収められた二つの総説)も引用されているので、どこかで引っ掛かったと思う。だが、それでも哺乳類学を専攻する方に巡り会うのは難しいかも知れない。本書で紹介された欧米の専門家のように、研究活動を展開しつつ優れた啓発・教育活動を展開する姿勢は、我々(寄生虫学者)も学ぶべきと痛感した。なお、(査読後受理された)科学論文は研究の根幹をなす活動であり、啓発・教育活動ではない。p169 で「啓発・教育活動」の具体的な 11 の項目として、2 番目に(ちなみに、1 番目は「対話」、3 番目は「講演」)「科学論文刊行と新聞への寄稿」が掲げられていた。また、科学論文刊行が(同じ活字が並んだ媒体であっても)新聞記事と同列的に扱われたことも、明らかに誤解を招く。この部分は海外の事例紹介をただけなので、本著者の責任ではないかも知れないが、どこかでフォローして欲しかった。おっと、「そのくらいは、自分でやりなさい!」という声がどこからともなく……。野生動物医学にあって不動化は最重要事項の一つである。したがって、もはや定番となった麻酔薬のコンビネーション、「ケタミン・ドミトール」のカワウソ野生個体への禁忌(p192)は、是非、引用文献を付けてもう少し詳しく解説して欲しかった。もう一つ、この分野に関わり保全施策にも強い悪影響を与える疾病(特に感染

症) のコントロールについても、「保全」あるいは「再導入」のどちらかの章で盛り込んで頂きたかった。たとえば、都市排水に含まれるトキソプラズマ原虫が、米国沿岸の多数のラッコに感染、致死性脳炎を惹起したことなど、いまやかなりよく知られている。おや、またまた聞こえた。「だから、自分でおやり！」(文責 浅川)

文献 Machida, M. 1973. *Heterosentis plotosi* (Acanthocephala: Arhythmacanthidae) from Japanese otter. Res. Bull. Meguro Parasitol. Mus.(7): 24-25. 亀谷 了・大鶴正満・林 滋生 (監). 1999. 日本における寄生虫学の研究. 第 6 巻, 目黒寄生虫館, 東京: pp. 672. (橋本幸江・浅川満彦 酪農学園大学 獣医学部 野生動物医学センター)